

---

# 学校教育における尺度とインクルーシブ教育

東京大学大学院教育学研究科  
バリアフリー教育開発研究センター特任助教  
二羽 泰子

---

私は、バリアフリー教育開発研究センターにおいて新たに取り組みを進めることとなった、インクルーシブ・ダイバーシティ教育プロジェクトの一員として、2017年の10月に着任しました。専門は教育社会学であり、学校組織がいかなる条件において排除的あるいは包摂的に変容するのかについて、学校現場でのフィールドワークを基に研究してきました。また、研究者を志す以前には、アジア・アフリカ各国の国際協力プロジェクトにおいて、インクルーシブ教育やマイノリティの社会参加に関わる調査・実施に関わっていました。そのような経験の中で私がずっと不思議に思っていたのは、なぜか学校教育の問題は、世界中どこへ行っても画一的な尺度の下に語られるということです。言うまでもありませんが、日本社会において評価される力と、アフリカ社会において評価される力は、人々の認識レベルにおいても大きく異なっているように思います。また、同じ国内であっても、例えば経済的に裕福な家庭の中で評価されやすい力と、経済的に厳しい家庭で評価されやすい力は異なることが、社会階層ごとの文化の違いとして論じられています。ところが、学校において求められる力は常に「学力」です。各都道府県が全国学力テストの結果に一喜一憂し、日本政府が国際的な学力テストであるPISAの成績に翻弄されていることは、「学力」が学校教育において重要な評価尺度になっていることを何よりも象徴しているといえます。

学力は広い意味でいえば、学校において醸成される力であり、それに何を含まかについては、それぞれの子ども背景によって、あるいはそれぞれの国や地域の文脈に応じて異なっていますが、論理的には問題はないはずです。しかし実際には、文部科学省もOECDによって提起された教育達成において外せない主要な能力（キー・コンピテンシー）を教育政策において掲げているように、「学力」という尺度がキー・コンピテンシーや学力テストなどのグローバル・スタンダードに適合する形で学校教育における個人の評価を規定しているといえるでしょう。

学校ができた頃の学校の役割は、文字と計算を獲得させることだけでした。特定の目的の下に形成される集団（ゲゼルシャフト）だったわけです。手工業社会では、家庭や地域が「社会」としての教育を担っていたため、学校は重要な「社会」とは考えられていませんでした。しかし産業社会の到来とともに、社会の一因として関係をつくっていくこと、協同して達成することなど、これまで家庭や地域社会が担ってきた役割は、すべての子どもたちが集まる共同体（ゲマインシャフト）としての学校に求められるようになりました。しかし学校は、個人の達成度を評価する手段しか持ち合わせておらず、協同で成し遂げた達成は、個人の能力を発揮させることをむしろ妨げるものとさえ理解されかねない文化があります（Dewey 1899; 志水 1990）。

このような個人の能力を尺度とした学校文化の下では、様々な社会的マイノリティが学校において「できない存在」もしくは「問題のある存在」として解釈されてしまいます。そうしたスティグマから逃れるためには、その個人が努力・改善するより他に方法はありません。しかし、H. S. ベッカーがラベリング理論において指摘したように、一度ネガティブなラベルを貼られた人々は、そのラベル通りの存在へと作り替えられていきます。例えば、「勉強ができない子どもは将来稼げない」、「障害のある子の行き場は福祉作業所しかない」、「教員の指示を聞けない子は社会にも適応できない」といったような、我々が持っている逸脱者に対する規範が社会を作り、実際にラベルを貼られた個人を規定していくからです。学力が高い子が社会で成功するという規範も同様に、そのようなラベルを貼ることによって、社会が学力が高い人を押し上げ、低い人をおとしめていくのです。

いわば語り尽くされた感のあるスティグマやラベリングといった議論ですが、そうした理論を完全に乗り越えた議論が存在するわけではありません。社会構造や現象の解釈の一つとして、現代の理論にも通底する問題を提起していると思います。

現在の学校教育の組織フィールド内で議論しても、「学力」に代わるものもしくは「学力」と対置できる尺度を見いだすことは難しいと思われます。我々のような学校現場を多少なりとも知っている研究者ができることの一つに、「学力」に代わる、社会的マイノリティの包摂を推進する尺度を、現在の学校現場に即して見いだしていくことが挙げられるかもしれません。

#### 【引用・参考文献】

Becker, Howard S., 1997, *Outsiders: Studies in Sociology of Deviance*

(New edition): Free Press.

Dewey, John, 1899, *The School and Society*, Siu Press.

Goffman, Erving, 1963, *Stigma; notes on the management of spoiled identity*, Prentice-Hall.

志水宏吉, 1990, 「学校文化論のパーспекティブ」長尾彰夫・池田寛編『学校文化 深層へのパーспекティブ』東信堂,11-42.